

教会における交わりは、その関係が深まれば深まるほど人間関係は難しくなり、個々の教会員は傷つきやすくなっています。普通、私たちは互いに信頼関係が深まれば人間同士の結びつきは強くなり、その関係性はますます良くなると考えがちですが、神のみ業が働く教会に生まれてくるものは弱さと傷つきやすさなのです。教会が弱さと傷つきやすさを生み出すというと、怪訝な顔をする方がいると思います。しかし、教会は自分と他者の弱さと傷つきやすさから逃げないで、それに向き合うことで、弱さと傷つきやすさを通して人と人が結びつくことを学ぶ教習所のようなところなのです。

そもそも人を受け入れるためにはまず心を開く必要があります。心を開くためには自分の中に他者が入ってくることを許さなければならず、人が入ってきやすいように自分の防御を低くする努力が求められます。けれども、自分の防御を下げることは人間としての弱さや欠け、未熟さや憎しみの思い、自らの闇の部分と互いにあらわにするわけで、信仰者同士は教会において互いの弱さや欠け、傷つきやすさという脆さを抱きつつ出会うこととなります。ただし、この弱さは強さに敗北した弱さではありません。わたしたちは弱さを強さの欠けたものと考えがちですが、教会において出会う弱さは、パウロが言うように神の力が働いている弱さなのです（IIコリント12章9節）。神の力が弱さの中で完全に働くとき、人間は自分の弱さのゆえに生命の尊さやおしき、優しさを知ることになるからです。

実は、私たち人間は弱さがなければ生命の尊さもおしきも理解できない存在なのです。これは弱さに人間性を深める側面があることを示しています。弱さが自己理解を深めるのです。そのような力が働くとき、パウロのように弱さが恵みであることに気づくのです。病や苦難に出会うことは誰にとっても避けたいことですが、それらの苦しみに出会わなければ、生きる意味を問うこともないでしょう。病んで苦悩する経験がなければ、私たちは本当の意味で他者への愛や思いやりが自分の内面から引き出されることがありません。そして、生命の尊さや他者への愛や思いやりが引き出されたとき、私たちはそこに神の力が働いていることを知るのである。

人間の交わりにおいては、人間の限界性やエゴイズム、利己主義があらわになります。理念的には誰でも人を純粋に愛することができると思いますが、実際に他者といくと、どれだけ愛せないか、どれだけ他者を拒絶しているかを知ることになります。また、どれだけ自分自身の利害にこだわっているかを知ることになります。そして、それは教会の中における交わりにおいても同じです。自分の弱さや欠けに気づくことが教会の働きの一つであるとき、言うことができるのです。このように自分自身の本¹にされることを通して、神に受け入れられるためには自分を変革しなければならぬことが個々人に啓示されるのです。

このように信仰者はキリストの体である教会に連なるためには自分の弱さに向き合い、自己が変えられることを受け入れ、象徴的な意味で古い自己に死ぬことが求められていることを知るに至るのです。イエスは「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」（ヨハネ福音書12章24節）と語りました。それは自分が自分の人生の主体ではなく、神が自分の人生の主体であることを受け入れることで、どのような人生であっても、それが神の御旨だと、受容する力が養い育てられるからです。神の力は脆さの中に働いて信仰者を養い育てるのです。パウロが「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」（ローマ書12章2節）と、神の力によって自分を変えさせられることの大切さを語ったのは、その意味においてです。神の力が教会員一人ひとりに働くのは、み霊が各人それぞれに違ったかたちで注がれているからです。

パウロはIコリント12章冒頭から教会に働く神のみ業について、どのように理解するべきか。そして、教会員同士が神のみ業をどのように用いて教会形成をしていくべきなのかについて、自分の考えを譬えによって語ります。具体的には4～6節で、教会員に現された神のみ業を3つの言葉で表します。その3つとは「賜物 カリスマ」「務め ディアコニア」「働き エネルゲーマ」です。この3つの言葉で現された神の力は、霊の働きが一人ひとりに現れた（フアナローシス）結果であって、その目的は全体の益^{II}教会の益になるためだということです。つまり、神は信仰者一人ひとりに霊によってみ業を示します。それらを信仰者は明確には認識できませんが、賜物、務め、働きという側面で見ることができそうです。そして、神の力が信仰者に働くことの目的は教会全体の益を形成するためだということです。

ただし、神の力は個人に対しては3つの違ったかたちで示されるのですが、ある人には「特別に授けられたかのように思えるカリスマ」というかたちで与え、別の人には「人に仕えていくディアコニア」というかたちで奉仕の意識を芽生えさせ、さらに別の人には「信仰者個人の力量を超えた働きができる」かたちで与えます。それらは個人の能力や資質によるものではなく、神から与えられる霊の働きによるものであることが繰り返して確認されています（11節参照）。その具体例をパウロは8～10節で、ある人には知恵の言葉や知識の言葉、ある人には信仰、ある人には病気を癒す力、ある人には奇跡を行う力や預言する力、霊を見分ける力、種々の異言を語る力、それを解釈する力を与えると言っています。このようにパウロは教会の一人ひとりに霊によってさまざまな賜物が与えられており、神の賜物を受けた人々からなる信仰共同体として教会を理解すべきだと提唱しています。

12節では教会を人間の体にたとえて、『体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である』と語り、唯一の神の働きによって、13節『わたしたちは、ユダヤ人であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです(14節)。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています(15節)。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか(16節)。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか(17節)。もし、体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで臭いをかぎますか。このようにパウロが言うのは、コリント教会の中では異言を語る者が、自分が霊的に優れていると誇る傾向があったからです。また、その他の賜物においても、それをあたかも自分に属する力のように自慢する人たちがいたからです。教会内が霊的なレベルにおいて格差社会になっていたのですね。だからこそ、パウロはすべての霊の現れは神の目的に仕えるためであり、教会全体の益のためであると主張することで、神の前における教会員の平等性を主張したのです。この場合の平等性とは、洗礼によって神の霊を飲んだ点においては皆同じだということです。

しかし、実際のコリント教会では13節にあるようにユダヤ人、ギリシア人、奴隷、自由人といった民族や社会的背景の異なる人々が教会を形成していたので、それぞれの構成員は古いアイデンティティや能力を根拠に自分たちの信仰の優位性を主張し、教会は分裂の危機に直面していました(14〜21節まで参照)。

「足が私には手ではないから体」教会の一部ではないとは言えない」「耳が私には目ではないから体」教会の一部ではないと言えない」という表現における足と手、耳と目はおそらく教会内における強い者と弱い者との対立関係が念頭にあったからでしょう。外の社会はかりでなく、教会の中でお互いに比較して優劣を決めたがるのは人間的な思いがあるからです。ここで注意したいことは、強い者に弱い者を排除しないことを喚起しているだけでなく、自らを弱いと考える教会員にもその考え方の転換を求めている点です。19節で「すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるのでしょうか」というパウロの問いは、自分に価値がないとか、自分を重要でないと考えるべきではないことを示しています。これは教会全体に対して自分はほんの一部であるという弱さに囚われている人に対する言葉です。コリントの教会を見る限り、主の体である教会は神のご計画に従って内部で分離していたのです(18節)。これは神が意図した多様性だということです。このような分離は、すべてが目であるとか、すべてが耳であるということであっては、体は異様な姿をもつことになります(17節)。それゆえにパウロは、教会員は自分には価値がないとか、自分は教会のなかで重要な存在ではないと考えてはならないと言います(15〜16節)。教会にとっては「ほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。私たちは、体の中でほかよりも格好が悪い(＝価値がない)と思われる部分を覆って、もっと格好よく(＝価値がある)しようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、……(しかし)神は見劣りとする部分をいつそう引き立たせ、体を組み立てられました(22〜24節)と語って、パウロは強さや弱さの価値観に振り回されないように警告しています。そうすることによって「体(＝教会)に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮しあう(25節)ことになっているのだと言うのです。

さらにパウロは弱さを抱えた教会員同士が互いに配慮しあうことによって、互いの苦しみを担い合う関係性が生まれると言います(26節)。「ここで「配慮する(メリムナオー)という言葉は、「同じことを心配する」「心を一つにして心配する」という意味の言葉です。ここにおいて教会員同士が互いの弱さをケアしあうことの大切さが浮き彫りになってきます。ケアという営みは人間が生きていくうえで不可欠なものです。ケアというと、他者に対して自分の時間やエネルギーを注入するために自分のもっているものを一方的に失うイメージがありますが、他者へのケアは自分の人生を成熟させ充実させていくためには欠かせないものなのです。なぜなら、ケアという営みには「相手へのケア」だけでなく、「自己へのケア」が含まれているからです。

たとえば、人間の生育を見ていくと、保護者による長い期間のケアを受けて赤ん坊は人間として成長していきます。人間がケアを受けて成長するためには20年以上の長い養育が必要とされます。そもそも赤ん坊はまったく無力な状態で生まれ、その無力な状態に留まり続ける依存期間が他の動物と比べて格段に長いのが特徴です。それは一人前になるのに時間がかかるということではなく、長い期間ケアを受けることの摂理は、自分がケアをする側になったときにどのようにケアをするべきかの術(すべ)を身につけるために必要不可欠な「時間」であり「体験」だということです。このケアを受ける期間が人間の発達と生育にとつてとても重要で、その受動的な営みによって適切な「自己へのケア」を身につけるのです。人間は誰もが自己へのケアをしながら生きることを通して「いのち」を育むのです。もし、自分のことに無関心であったり、物体のように粗末に扱ったりするならば、その心は荒廃してしまい、自分自身を見失ってしまうでしょう。

ケアを受けることによって、私たちはケアの何たるかを自然と身に付け、自分自身をケアすることの大切さを繰り返し学びます。教会は他者との関係を弱さや無価値と思われる欠けと向き合うことで、「他者へのケア」を神の摂理として理解し、それを自覚的に行う者へと信仰者を変えていくのです。しかも、そこでは他者をケアすることが自己中心的な自己満足であってはならず、同時に自己をケアすることが単に自分中心主義にならないように、神が教会員同士を出会わせているのです。人が自己と他者へのケアを行う存在だからこそ人類は氷河期でも生存し続けることができたし、困難な事態に直面しても生き抜く力が与えられているのです。人間が愛する能力を身につけ、他者との関わりの中で他者に配慮し、思いやる力が育つのは、自己と他者へのケアを行いながら生きていくからです。この学びが教会においてなされていることを恵みとして受け止めていきたいと思えます。